

シンポジウム「アメリカス地域の文化と言語の学びと継承」を終えて

本特集は、2022年12月3日（土）に対面及びZOOM配信というハイブリッド形式で開催された天理大学アメリカス学会第27回年次大会で行われた公開シンポジウム「アメリカス地域の文化と言語の学びと継承」で講演・報告いただいた6人の方に、お寄せいただいた論考である。

アメリカス地域では、ネイティブ固有の言語文化の重要性は認識されつつも、今や移民がもたらした言語文化が各国の基礎的な言語資源、文化資源となっている。さらに現在のグローバル化時代においては、人の移動の増加に伴い、言語教育でも学習者の背景が多様化し、母語を共有していないことも多くなっている。言語と文化の学習や継承も多様化そして複合化している中、シンポジウムでは、継承する「言語」や「文化」、戦略的に学習する「言語」や「文化」など多様な観点から検討し、同時に、グローバル化した世界に生きる我々の「言語文化」や「学習」「継承」について再考した。

シンポジウムの構成は、第一部の基調講演、第二部のパネル発表、第三部のパネルディスカッションである。

第一部の基調講演では、マヤ語・マヤ文化研究の第一人者である東北大学の吉田栄人先生（東北大学大学院国際文化研究科）に、「植民地時代カトリック宣教師のマヤ語文法と現代のマヤ語研究をつなぐ」の題でご講演いただいた。

第二部のパネル発表では、5人の研究者にご登壇いただいた。

大川ヘナン氏（大阪大学大学院人間科学研究科）は、「言語・文化継承は選択可能なのか？在日外国人集住地域を事例に」の題で、ブラジル人保護者が母語・母文化を重要視しつつも、日本ではその言語と文化継承が有利に働かない実態というジレンマを抱えていることに触れ、言語・文化継承は誰のためなのかを議論した。

市川禎理先生（関西外国語大学非常勤講師）は、「複数人会話における話者交替と発話の重なりに関する日西対照分析」の題で、自然会話を分析することで得られた知見の言語教育での活用を目的に母語話者による自然会話を分析し、自然会話における発話権の取得・維持の方法をはじめ、会話への参加の仕方の相違を明らかにした。

橋本和美先生（天理大学准教授）は、「スペイン語を取り入れた漫オワークショップ —オンラインと対面授業の比較—」の題で、多様性が叫ばれる現代社会において、大学生に求められている力とは何かを確認し、コミュニケーション力を高め、学修者間の絆を深める漫オワークショップの有効性や今後の課題について考察した。

山本享史先生（天理大学准教授）は、「米国ハワイ州の外国語教育 —“World Languages”プログラムから—」の題で、多様な民族構成及び多言語状況が見られ、言語教育も特徴的であるハワイの外国語学習を紹介したが、現地ハワイ語よりスペイン語の学習を選択する生徒の多さなど、外国語教師の認識面だけではなく、学習者の言語学習モチベーションも垣間見えた。

小林千穂先生（天理大学教授）は、「日本の大学生の4年間の英語学習モチベーションの変化」の題で、入学時の学生が、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持っており、半年後も高いモチベーションを維持していることから、モチベーションの維持に貢献する要因について考察した。

第三部のパネルディスカッションでは、短時間ながらもパネリストとフロアから示唆的な意見がでたのを以下にまとめた。(敬称略)

大川：日本人とブラジル人の共生について、例えばブラジル人住民が多い保見団地では、日本人は高齢化しているが、ブラジル人は若い人が多く、他の団地のように分断が起きている。「日本人の知り合いはいますか」という質問には、「団地の外にはいる」という答えがよく返ってきたため、団地内で共生は課題として残っている。

山本：ハワイのヒスパニック人口のデータはないが、民族構成としてはそう多くはない。しかし、学習言語としてスペイン語を選択する生徒は多い。大学進学率では、アメリカ本土に行くケースも多くため、外国語の単位習得で大学に行くことを考えると、ハワイ語を選択するよりスペイン語を選択していると考えられる。

吉田：「継承語」ということばは奇妙に思える。誰かが継承させたいから「継承」、「継承語」ということばを使うが、本人である子どもや二世の子がどのことばを使うのかは本来自由である。例えば日系人が日本語を学びたいのであれば、日本語を「学習」すればいいわけで、「継承」する必要はない。メキシコでは先住民言語の復興運動が行なわれており、スペイン語教育を受けて育ってきた先住民のインテリを中心に70、80年代から文化継承が盛んに言われるようになった。自分たちの民族文化が失われつつある中で、世界の文化遺産であるから取り戻さないといけないというような、外国から降ってきたイデオロギーをもとに、自分たちの運動を展開している。

継承を考える際、教育者と学習者は分けて考えた方がいいのではないか。モチベーションの観点では、モチベーションを作り出すのは教育者であり、学習者の立場では、生存戦略であり、必要であれば学習する。アイデンティティの問題ではなく、自分の生活をよくするため、自分の社会的地位を高めるためのものである。ニーズがどこにあるのか、きちんと見極めないといけない。

山田：今回のシンポジウムの目指すところは文化と言語の学びと継承であるが、権威あるいは社会的圧力がキーワードとなっている。吉田先生の話では、カトリック神父たちの書いたものが社会的権威となり、信頼され絶対的であるということで、文化が作り出され、言語形成がなされていった。大川さんの発表は誰が言語文化を継承するのか、誰の圧力によって子どもたちは言語を継承しなければならないのか、が導き出される。西川さんの発表は会話の主導権という観点で、その場その場での社会的圧力によって話題の主導権に関わってくることを感じた。逆に、橋本先生の発表は社会的権威や圧力を感じない素地を作るのが大事であり、そういうものの中で言語教育がなされていると感じた。山本先生の発表では複言語、マルチリンガル、マルチタスクが素晴らしい、そういうものを目指しましょう、という見えない圧力がかかっていると感じた。

初谷：日本語とスペイン語の対象言語学という分野は、実際の言語教育、例えばスペイン語圏の学生に日本語を教える現場においてどのように役立つか明示してほしい。

市川：中級上級の学習では、言語自体の学習に加え、その背景にある文化理解が重要となってくる。学習言語の背景にある文化の理解が追いついていないと、言語の応対の中で誤解され関係がこじれることもあり、コミュニケーションに影響が出てくる。コミュニケーションスタイルの違いを実際の例を提示して比較するなど、文化理解を深める指導が必要だと思う。

小林：言語を学ぶのはメリットだけの問題ではなく、好きだから、その言語圏に対する憧れ、

文化に興味がある、などそういうところも言語学習のモチベーションになっていると思う。

吉田：モチベーションという言葉で全てを説明するのは難しい。教育者は学生たちに勉強させ、モチベーションを持たせるようにするが、学習者の立場から考えた時にそれって一体何だろう？ということになる。例えば、ことばが一番うまくなる近道はそのことばを話す恋人もつことである。そのニーズを持つと必ず勉強をしないといけないから。それがある意味でモチベーションであり、メリットである。モチベーションというよりも具体的なニーズを学習者が持つことが一番のモチベーションだと思う。学生たちが大学に入った時に持っていたモチベーションを維持できるかどうかは、自分がどういったニーズを見いだしていけるかにかかっている。例えば通訳者になりたいと思ったら、それに向けた勉強の仕方があるはずで、それを大学が提供をしてくれなかったら、どんどん失望してモチベーションがなくなる。具体的な目標を見つけて、そのためにどういった勉強をすればいいのかわかる、そして、それが提供できるかどうかは大学の教育者には大事である。

モデレーター

野中モニカ（天理大学）